



# 産地で役立つ 新技術の開発・普及

地域と連携してイセイモ生産の再興を目指す

特集  
地域に  
根ざっ



三重大学大学院生物資源学研究所・教授  
梅崎 輝尚 Umezaki, Teruhisa  
【URL】 <http://www.bio.mie-u.ac.jp/seimei/rikuken/lab2>

▲相可高等学校生産経済科、多気町役場、JA多気郡、三重県科学技術振興センターのみなさんと（相可高等学校総合農場にて）

### ◎地域からの依頼

イセイモは、丹波ヤマノイモ（京都・兵庫）、大和いも（奈良）、加賀丸いも（石川）などと同じヤマノイモ科のツクネイモ類に属するいもです。古くから栽培されており、大正天皇の即位時に宮中で行われた新嘗祭<sup>にいなるめさい</sup>\*では、ヤマノイモの代表として献上されたほど由緒あるもので、三重県多気郡が原産地であると言われていました。ところが、他のいもに比べて栽培が困難なうえ、生産者の高齢化により作付け面積や生産量は徐々に減少しています。2000年12月、イセイモ生産の再興を目指して取り組む多気町から、資源作物学研究室へ研究協力の依頼がありました。実態調査を行ったところ、種いも生産の効率化が重要であることを見出し、種いもを増やす新技術「細分割増殖法」を開発しました。

\*新嘗祭／「しんじょうさい」ともいい、「新」は新穀を「嘗」はご馳走を意味する。新穀を得たことを神様に感謝する稲作儀礼のことで、毎年11月23日に全国の神社で行われる。宮中では、天皇が感謝をこめて新穀を神々に奉るとともに、自ら新穀を食される。



イセイモ  
粘りに富んだとろろいも。アクが少なくコクのある味わいで、主に高級和菓子や料亭で重宝されている。

### ◎細分割増殖法とは

イセイモ栽培の慣行法では、約80g（1個）の種いもを植付け、300～400gのいもを収穫します。しかし、栽培中に病虫害で枯れたり、腐敗したものを除き、さらに翌年の種いもを残すと、実際の収穫量の半分程度しか出荷できません。そのため、市場価格では2kgで約4000円と非常に高価です。

より多くのいもを出荷するためには、たくさんの種いもを作る必要があります。調査の結果、大きな種いもから大きないもが採れますが、収穫いもと種いもの比率（増殖率）でみると、小さな種いもを植えるほど増殖率が高いことがわかりました。

出荷用の大きないもは慣行法で栽培し、翌年の種いも生産には小さな種いもを10g程度に切って用いると、効率的な生産が行えます。これが「細分割増殖法」です（図1）。

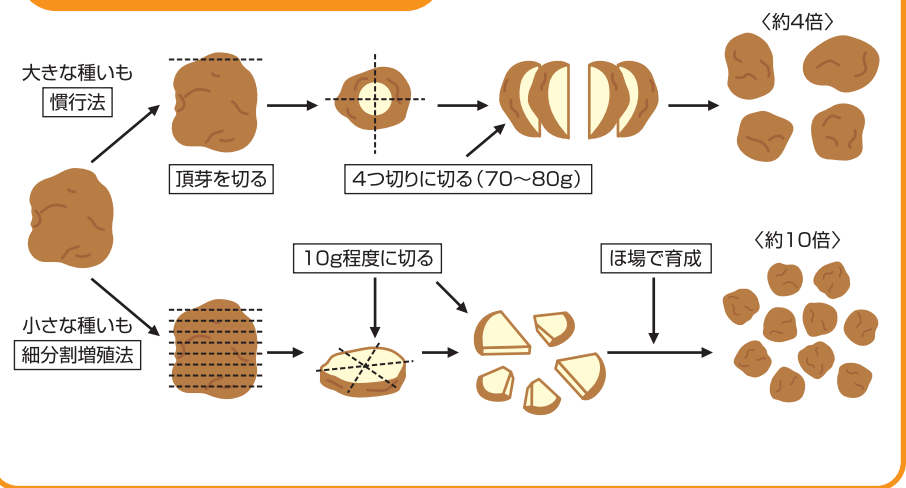
### ◎連携の成果

技術としては確立しており、多気町、三重県立相可高等学校、JA多気郡と連携してイセイモの増産に努めています。

相可高等学校生産経済科では、種いもを総合農場に植え、試験栽培を行っています。この実験をJA多気郡の農家が手伝い、途中経過を観察しています。過去2年間の結果を見ると、細分割増殖法を用いて育てたいもは、従来の種いもよりも効率よく成長したため、地域で徐々に普及してきました。今後、連携を深めていくことで、イセイモの収穫・出荷量が増え、新規参入する農家も出てくると思われます。

このように、産地に密着し、現場に対応できる新技術の開発・普及のための取り組みこそが、地域大学としての大きな存在意義といえるでしょう。

### 図1 種いもの切り方



### 連携の歩み

- 2000年12月 多気町よりイセイモの研究協力の依頼
- 2001年3月 多気町で丹波ヤマノイモ栽培について講演（梅崎教授）
- 2001年4月 資源作物学研究室でイセイモの試作開始
- 2004年4月 資源作物学研究室で細分割増殖法の実験開始
- 2005年4月 相可高等学校で細分割増殖法の実験開始
- 2006年6月 多気町と生物資源学研究室の相互友好協力協定締結
- 2007年3月 三重県科学技術振興センター農業研究部が共同研究に参加



▲相可高等学校総合農場にて植え付け中



▲多気町のイセイモほ場で調査（2007年6月21日）

イネ・ムギに比べてマメ類・イモ類の研究者は少ないんだって。魅力的な研究課題の宝庫だね！



### コラム 三重県立相可高等学校生産経済科

生物生産と経済のしくみを学び、経済に強く、環境に優しい産業人を育成するのが狙い。イセイモの試験栽培の他、初級園芸福祉士の取得、松阪牛の肥育や空芯菜栽培による水質浄化など、専門性を活かした取り組みに定評がある。